

化学農薬だけに頼らないスマートIPM農法による輸出向け茶の産地化

鹿児島堀口製茶有限公司

代表者：代表取締役社長 堀口 泰久

所在地：鹿児島県志布志市有明町逢原758

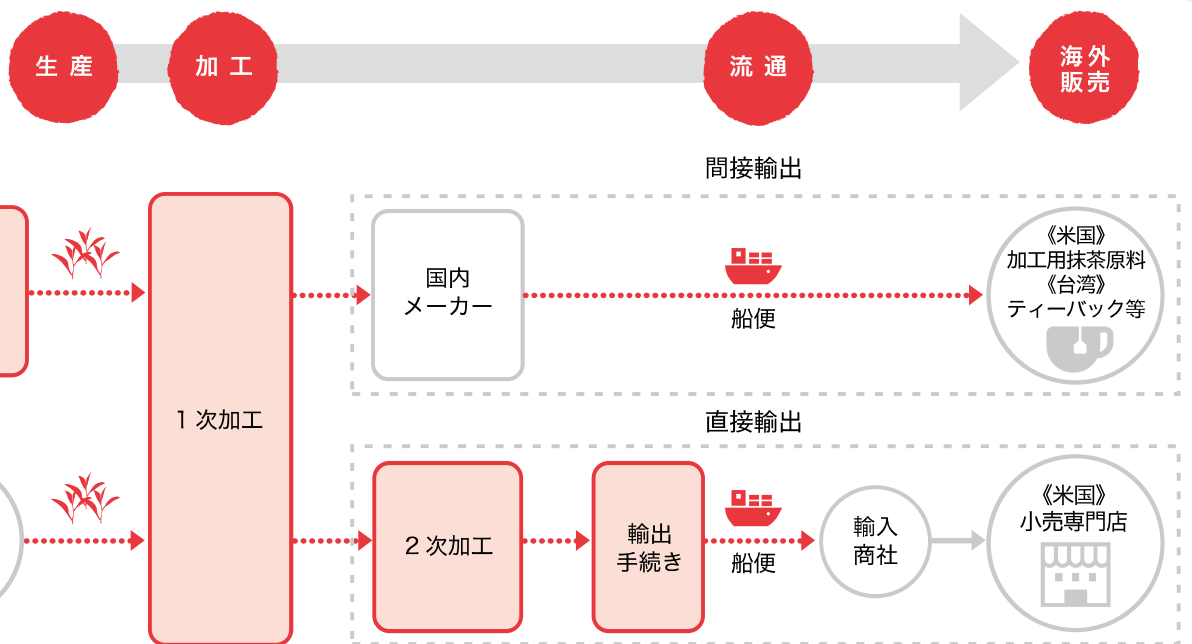
主な品目：抹茶原料、ほうじ茶原料等 4品目

主な輸出先国：米国、台湾、ドイツ等 約10か国

事業概要：

自社で茶葉の生産から加工し、当社の設立と一緒に設立した(株)和香園にて販売。自社農地120ha、契約農家約40戸と合わせ270haの茶畑を管理。2017年に大隅ティーナリー(株)を設立し、志布志地区を観光地化に取り組んでいる。

Business model



輸出の取り組み内容

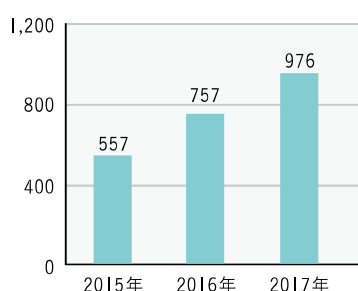
- 間接輸出として、1次加工した荒茶を原料用としてバルクで国内メーカーに販売し、メーカーが商品化して海外に輸出。主に米国向けには加工用抹茶の原料として、台湾向けにはティーバッグ等の原料となっている。
- 直接輸出としては、自社ブランドの「TEA3T(ティーとダイエットの造語)」や「抹茶缶」等を米国の専門店等に輸出しており、ファッションブランドがクリスマスイベント等で取り扱っている。
- 茶の原料も海外向けに、紅茶、ウーロン紅茶、碾茶(抹茶)、ティーバッグ用、急須用、ドリンクの原料用に分け、契約農家にも品種を指定して栽培してもらうことによって、輸出向けの茶葉を生産している。

取り組み経緯

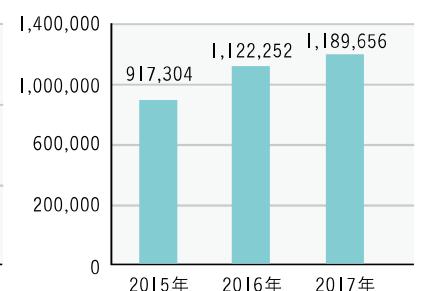
- 11年前より販路の一つとして輸出に試験的には取り組みはじめ、2007年にロンドンへ初めて輸出した。しかし、ここ数年は国内のお茶の相場が安定せず、2015年前後から特に悪くなった。その一方で、海外では日本食ブームが広がっており、米国ではお茶が普及していたので、販路を海外向けの輸出に切り替えることで活路を開くことができた。

実績

輸出額(百万円)



輸出量(kg)



Point!



● 契約農家を含む約270haにてスマートIPM農法を導入することで農薬や化学肥料に頼らない栽培方法を実践し、安定した「品質」と「量」の確保が可能となっている。また、当社が事務局となり契約農家40戸がJGAP認証グループ認証を取得するとともに自社農園の9haでオーガニック認証を取得、さらに国内のお茶では珍しい「レインフォレスト認証」等を取得する等、海外の需要に合わせた商品を生産できる体制を構築している。

[課題と解決ポイント]

課題 01

お茶の輸出で最大の課題は残留農薬の問題であり、特に米国、台湾、EUが厳しく、国内のお茶でも対応できるところが少なかった。

課題 02

輸出先の国によって対応が全く異なり、規制についても異なるので国ごとに対応する体制を整えるのが難しかった。

課題 03

海外では日本食ブームと言われているものの、日本茶を紹介してもすんなりと飲める外国人は少なく受け入れてもらえなかった。

解決 01

当社は元々、化学農薬だけに頼らない栽培方法であるIPM農法に取り組んでおり、契約農家40戸と連携して、スマート農業と掛け合わせたスマートIPM農法によって、残留農薬に全く引っかからずに、約270haの面積の茶畑で品質の高い茶葉を生産しており、安定的なロットでの供給が可能であった。

解決 02

国ごとにJETROに確認したり、直接SNSを使用して確認する等で対応した。残留農薬等の問題もあるが、商品自体ではなくパッケージ等が問題になることもあったので、その国に合わせたパッケージに変更した。また、国際情勢によって左右されることもあり、中国は輸出先として上位であったが、日中関係の悪化によって輸出できなくなった。

解決 03

普通にお茶ではなく、ミルクと混ぜたりすることによってお茶の裾野を広くすることから始めた。また、バラとお茶の組み合わせた自社開発の「フレーバークリーントーローズ」や大隅のゆずと組み合わせた「フレーバークリーントー大隅ゆず」等によって、これまでとは異なる消費者層や、コーヒーや紅茶のバイヤーが反応するようになった。

今後の事業展開

IPM農法と「茶畑戦隊チャレンジャー」を大隅半島で実践しているというストーリー性をアピールしながら、志布志港からの定期便を就航させることによって産地と海外を直接つなぐ直接輸出を拡大し、大隅地区全体をブランド化していきたい。



スチームバスターSL



新設した碾茶工場



海外の商談会の様子